

AMDA

多様性の共存

ジャーナル

2023 年 7 月 25 日 VOL.46 第 306 号

発行 / AMDA 〒700-0013 岡山市北区伊福町 3-31-1 2023 年

TEL 086-252-7700 FAX 086-252-7717

E-mail:member@amda.or.jp

夏号

夏

救える命があればどこまでも

連載インタビュー「支える喜び」シリーズ 第37回

公益社団法人岡山県看護協会

会長 二宮 一枝 先生

特定非営利活動法人アムダ (AMDA)

<https://amda.or.jp/>

特定非営利活動法人 AMDA 社会開発機構

<https://www.amda-minds.org/>

特定非営利活動法人 AMDA 国際医療情報センター

<https://www.amdamedicalcenter.com/>AMDA 兵庫 <http://amda-hyogo.com/>

**AMDA** かつて岡山県岡山保健所で菅波理事長と一緒に仕事をされていたそうですね。それが AMDA を知ったきっかけでしょうか？

**二宮先生** はい。私が保健師になって 3 年目の昭和 49 年に岡山保健所勤務になりました。当時は同保健所に若い医師が多くいらっちゃって、菅波先生もその中の一人でした。この時が AMDA との出会いになるのですが、その頃はよく知りませんでした。ただ、当時から菅波先生は、「保健師の仕事はとても大事で、医師も保健師の活動を知る必要がある」と、よく言われていました。私は、行政の保健師として、過疎地域をはじめ、多くの保健師の指導などにも関わっていました。当時は行政保健師の実務経験を有する教員も少なかったので、大学教員として保健師の教育に携わりたいと思い、50 歳を機に岡山県立大学で教鞭をとることになりました。大学院では当初から菅波先生の『災害医療特論・演習』を開講しており、保健師になりたい学生には受講を勧めていました。

**AMDA** 二宮先生は岡山県立大学の教授として、何度かネパールにも足を運ばれていますね。

**二宮先生** 私は、岡山県玉野市にある商店街で生まれ育ちました。現在は、さびれてしまいましたが、当時は映画館もあり、医療環境にも恵まれていました。両親が共稼ぎだったので、長期休暇はいつも父の実家（離島）に預けられました。島には岡山大学が運営する診療所がなく、発熱した弟を連れて祖母と 4 キロの夜道を徒歩で受診した記憶は今も鮮明に残っています。医療環境に恵

AMDA を支えてくださっている方々の様々なエピソードをインタビュー形式でお届けします。今回は公益社団法人岡山県看護協会会長（元岡山県立大学保健福祉学部看護学科特任教授）の二宮一枝先生です。

（聞き手：ネパール担当 アルチャナ ジョシ）

まれた地域とそうでない地域を、子供の時から両方経験しました。また、若い頃に聞いた、ネパールでの結核患者への支援に深く感銘を受け、一度ネパールには行きたいと願っていました。幸いにも AMDA との協定により、大学とネパールの交流が始まりました。言葉、文化、習慣の違う過疎地域での生活体験は、災害時の保健医療活動にも活かせるので、保健師を目指している学生のための演習科目を設けました。また、ネパールの看護師たちの日本での研修も実施しました。

AMDA 西日本豪雨災害支援活動の際、岡山県立大学にもご協力いただきました。

**二宮先生** 岡山県立大学は、AMDA および岡山県総社市と三者協定を結んでおり、大学として AMDA の支援活動に参加することは最優先事項でしたので、AMDA が支援活動を行っていた倉敷市立岡田小学校に学生を派遣しました。また安定した活動の継続のため、学生とともに教員も参加できるように調整しました。その際に被災者に対して足湯を施しました。最近、精神疾患を患っている患者さんに足湯を施すよう勧めている記事を読みました。足湯は医療従事者のおごりを克服するためのもので、「私は支援者だ、医師だ、プロだといった傲慢さを軽減するためのものだ」とも書いてありました。足湯を施す時の立ち位置には意味があります。私は、AMDA が西日本豪雨支援活動の際に足湯を行っていた時のことを思い出しました。これまで AMDA の活動に参加して、たくさんの学びがありました。支えられているのは私の方です。今後とも自分ができるところをできる時にしていきたいと思っています。



# AMDA 中学高校生会・ Bangladesh 学生間交流 2023



2023年4月30日、AMDA 中学高校生会(以下、中高生会)が取り組む平和構築プログラム、『Bangladesh と日本の中高生によるオンラインフォーラム』が開催されました。

今年で3回目となるオンライン交流会には、中高生会から10名、Bangladesh から学生10名、司会および通訳として3名の日本人大学生ボランティアが参加しました。交流会は参加者全員の自己紹介から始まり、中高生会のメンバーは日本での防災対策や災害用の非常食について発表しました。一方、Bangladesh の学生からは同国における洪水被災者への緊急支援活動と、AMDA Bangladesh 支部が取り組んでいるダウン症の啓発キャンペーンに関する発表がありました。また、岡山が発祥とされる桃太郎伝

説や、“Bangladesh 建国の父”に関する話があったほか、日本とBangladesh の歌がそれぞれ披露されました。

交流会の最後には、参加者全員が、“自分たちの描く将来像が、どのように地域や世界の平和に対して貢献できるか”について語り合いました。言葉、文化、社会、環境など全く異なる国で生活している学生たちがお互いを刺激し合えた良い交流会でした。この交流会を通じて学んだことを、今後の世界平和に繋げていただければと思います。

## 中高生会参加者からのコメント

\*「前回のプログラムで、自分自身の知識の偏狭さや知識不足を感じましたが、2度目となる今回もそれは変わりませんでした。特に、ダウン症啓発キャンペーンに関するお話はとても興味深いもので、改めて、知識を得ることの大切さを実感しました」

\*「全て英語だったので準備が大変でしたが、練習を重ねた上でプレゼンができたので良かったです。国を越えて交流ができて嬉しく思いました」

\*「この交流会ではBangladesh の歴史やダウン症の人達に対する支援について知ることができ、すごく勉強になったと思います。また、自分の夢について他の人の感想を聞くことで、夢を達成できるという自信も湧きました」



## AMDA Bangladesh 支部ラザック事務局長からのコメント

「日本とBangladesh の学生の間で行われる平和構築プログラムも今年で3回目を迎えました。今回もオンラインワークショップに参加することができ、大変素晴らしい機会となりました。準備段階から積極的にワークショップに参加して下さった皆さんに心から感謝しています。このプロジェクトは、異なるコミュニティ間において、調和のとれた関係性の構築を促し、和平実現のプロセスに寄与することを目的としたAMDA独自のプログラムです。AMDAが推進する『世界平和パートナーシップ (GPSP)』の最も重要な目的は、AMDAの理念を世界中に広めることです。多様性の共存を目指す『開かれた相互扶助』(Open Sogo-Fujo) の概念は、過去30年に渡り、AMDAの活動の基軸となってきました。地域社会における様々な人種や宗教の平和的共存を実現するにあたり、AMDA Bangladesh 支部は今後も平和構築プログラムを実施していく所存です。

また来年のワークショップへの参加を楽しみにしています。このイベントを成功させるためにご尽力いただいた皆さんの素晴らしい貢献に感謝します。本当にありがとうございました」



(AMDA 中学高校生会 担当 アルチャナ ジョシ)

## ネパール・ブトワール市より市長および AMDA 現地関係者が来日

2023年5月29日、ネパールよりブトワール市の市長をはじめとする6名が来日し、AMDA本部のある岡山を中心に、行政機関、商工会、大学、医療機関等を視察・訪問しました。

今回来日したのは、ブトワール市のケル・ラジュ・パンディ市長と職員1名、ブトワール商工会議所の元会長および現会長、AMDAネパール支部の元支部長、そして同市にある『シッダールタ母と子の病院』の院長です。

訪日のきっかけは、菅波茂 AMDA 理事長による昨年9月のネパール訪問でした。AMDAネパール支部が運営するシッダールタ母と子の病院を訪れた際、ブトワール市長を表敬訪問し、市長と関係者を日本に招待したのです。

5月30日、一行は岡山県総社市の片岡聡一市長を表敬訪問し、総社市が力を入れている障がい者雇用政策の話聞き、その後、障がい者が働いている施設を見学しました。総社市は様々な福祉政策を実施しており、この日、両市の紹介と、今後の取り組みなどについて協議を行いました。

翌31日には、総社市にある岡山県立大学を訪れました。AMDAと連携協力協定を締結している同大学では、看護師や保健師を志す学生が多く学んでいます。シッダール



(写真提供：総社市役所)

タ母と子の病院のバシャール院長が中心となり、学生8名を対象に講義が行われました。同病院での看護学生の研修などについて話をされました。

6月1日と2日は、県内の医療機関の視察と、岡山市長および岡山県商工会議所連合会への表敬訪問が行われました。岡山市立市民病院と倉敷中央病院を視察した際、一行は、ネパールでの病院拡充を検討するにあたり、日本の施設を参考にしたほか、日本の医療者との技術交流などについて意見交換を行いました。

最終日に一行は神戸に移動し、AMDA兵庫のメンバーを訪問。毎日新聞神戸支局の会議室にて、シッダールタ母と子の病院に関する講義を行いました。その中で、AMDAネパール支部のシュレスタ元支部長は、AMDA兵庫による長年の支援に謝意を表しました。また同団体の江口貴博理事長からも、「今後も引き続き支援を行っていきたい」との温かいお言葉をいただきました。

その後、6名は全日程を終了し、無事帰国の途に就きました。AMDAは引き続き、ネパールでの活動を続けていきます。今後ともご支援の程、何卒宜しく申し上げます。  
(ネパール担当 アルチャナ ジョシ)



## AMDA マリノ農場より近況報告 (インドネシア)

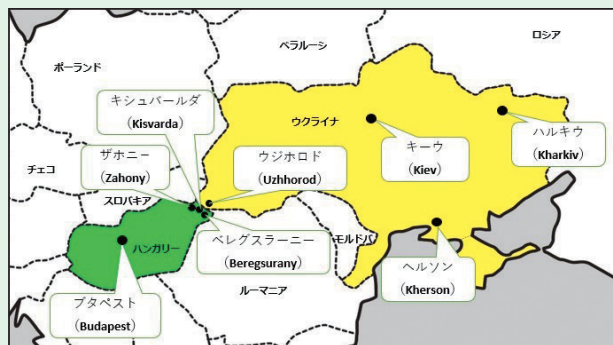


AMDAフードプログラムの一環として、2014年からインドネシア・南スラウェシ州のマリノ村で有機農業に取り組んできたAMDAマリノ農場。日本から持ち帰った技術を地域に根付かせ、来年で開設10周年を迎えます。AMDAが掲げる「食は命の源」の考え方は、マリノ村での有機農業事業に引き継がれており、既存の農業から有機農業に転換を図る現地農家が年々増えています。現在、有機農業を行う農家は常時15軒ほどで、米、赤米、からし菜、キュウリ、レタス、白菜、パクチョイ、青梗菜などの作物を通年で栽培しています。農場の継続性という意味では今後の見通しも明るい一方で、目下の課題は、プロジェクトの事務方を兼任できる人材が不足している点です。現在、農作業や技術指導に従事しながら、日本側との調整や現地でのマーケティングに携わる専任スタッフがないため、このような統括役を公募し、現地に派遣するなどの道を模索する必要があります。開設から10年目を迎えるにあたり、マリノ農場の(あるいはAMDAフードプログラム全体の)次なる方向性を見据える時期に差し掛かっているといえるかもしれません。

(AMDA本部 近持 雄一郎)

AMDA は 2022 年 2 月 24 日にウクライナで勃発した人道危機による避難者のための支援活動を継続して行っています。

同プロジェクトは、令和 4 年度の外務省 NGO 連携無償資金協力事業として採択され、本年度は、ウクライナ国内で避難を余儀なくされている方々の支援活動をハンガリーおよびウクライナ国内の団体と協力して行っています。



ハンガリー側の連携団体

◆ヴァルダ伝統文化協会



ヴァルダ伝統文化協会は、ウクライナとの国境から約 20 キロの距離にあるキシュバールダにあります。会長で産婦人科医であるウクライナ出身のタチアナ医師（ハンガリー医師免許）が率いる団体です。ウクライナ西側のウジホロド地域にある医療施設を中心に、タチアナ医師自らが足を運び、医薬品や食糧燃料の提供、光熱費の負担などの支援を行っています。

また、ウクライナのドニプロ地域にある孤児院から西側のムカチェボ近辺に避難してきている子どもたち 110 人への物資支援も実施。支援開始当初は、協会の担当者が訪れても、子どもたちは周りの人を信頼できず、顔を見せることはなかったものの、今では全員で出迎えてくれるようになりました。

今後は、ダムが決壊し大規模な洪水が発生したウクライナ・ヘルソン地域でも多くの被災者のための食糧支援を実施する予定です。

◆メドスポット

ウクライナ国境から 800 メートルの距離に位置するベレグスラーニーで、AMDA とともに昨年 3 月に医療支援活動を行った医療団体です。昨年 11 月から救急車でウクライナ西部の避難所を中心に医療支援を行っています。AMDA は、同団体を通じて、ウクライナ国内の避難所に医薬品や食糧を提供し、また救急車の燃料費等を支援しています。メドスポットの活動状況は動画（QRコード参照）でもご覧いただけます。



聞き取りから見てきたハンガリーおよびウクライナでの諸問題

AMDA は、上記団体との支援活動を、NGO 連携無償資金協力事業として実施するため、5 月中旬に職員 1 名と看護師 1 名をハンガリーに派遣。ウクライナの情勢や現在の支援状況について、各団体の担当者に聞き取りを行いました。それぞれの団体から聞き取った現状は以下の通りです。

【ハンガリー側での問題】

「昨年 10 月は、物価の高騰が問題でした（食料品は 3 割上昇）。しかし、今回はそれに加えて、物資の購入制限が付いたことで、ハンガリーからウクライナに持ち込むことのできる 1 回分の支援物資の数にも制限が付くようになりました。今までと同じ量を持ち込むためには輸送回数を増やす必要があります。しかし、燃料費も高騰しているため、支援を取り巻く状況は一層厳しさを増しています。こうした理由から、支援を寄せる人たちの数は激減しています。一旦避難してきた子どもたちの状況をその後追跡できておらず、彼らがその後どのような暮らしをしているのかが心配です」



## ウクライナ国内の連携団体

### ◆セントミッシェル小児総合リハビリセンター

ウクライナ・ザカルパツチャ州ウジホロド地区にある、子どものリハビリに特化した施設で、ウクライナ西部に位置するため、国内全土から障がいを持つ子どもや家族が避難してきています。AMDAは同施設を通じて、戦禍で心理的なダメージを受けた子どもたちや避難者に対し、医療の提供、



ならびにリハビリなどの専門的な治療を行うとともに、食糧や暖房器具、光熱費などを提供しています。現在は、医薬品も高騰しており、避難者が適切な医療を受けることが難しくなっている状況です。こうした中、通常では高額になる歯科の治療も、避難者に対しては無料で行っています。このほか、通常の治療に使用する抗けいれん薬、抗ウイルス薬なども提供しています。

### ◆ダイナスティメディカルセンター



戦闘の激しかったハルキウにあるため、ダイナスティメディカルセンターの周辺では多くの人たちが避難しようとしても避難できず、過酷な生活を強いられています。同メディカルセンターを通じて、AMDAは周辺住民への医療、食糧、燃料、暖房器具の提供など、全面的な支援を行っています。また患者さんの中にはS字結腸癌摘出術後の方もいます。更に、腎臓術を10回以上受けた自分の子ども(7歳)のために命をかけて戦っている若いお母さんがいます。薬物治療が子どもにとって唯一の効果的な治療法ですが、継続するためのお金がありませんでした。AMDAの支援によって治療を継続できることになった時、お母さんは、「AMDAと日本の皆様に生きる機会を与えていただいた」と、娘さん

とともにこれからも生きていける喜びを伝えてくれました。

### 【ウクライナ側での問題】

#### ◆セントミッシェル小児総合リハビリセンター（ウクライナ西部）

「東側の紛争地から避難してくる障がい者や病気の重い人たちを預かっています。そのような人たちは、家族で避難してくるため、徐々に生活も困窮してきており、支援する側にも、資金的な部分を含め、様々な問題を解決する能力が求められます」



#### ◆ダイナスティメディカルセンター（ウクライナ東部）

「避難していた子どもたちが、家族と一緒に暮らすためにハルキウに戻ってきています。このような子どもたちは、建物の地下室で一時的な教育を受けています。また長期的な治療の継続は、経済的にも物理的にも困難を極めています。そのような中で、できる限り最善の治療が行えるよう病院再建に尽力しています」

(AMDA 理事 難波 妙)

■ご協力ありがとうございました。

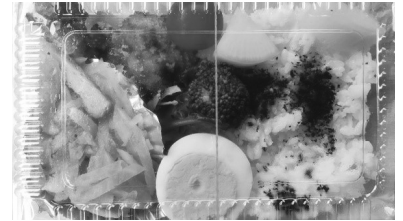
---

### 【AMDA 子ども食堂支援プラットフォームからの報告】

AMDA が支援する子ども食堂では、配布するお弁当の調理なども自前で行っており、利用者からは、「毎回楽しみにしています。いつもおいしいお弁当、栄養たっぷりで親も子ども大喜びです」との感想が寄せられています。

この度、岡山県内の農家さんのご支援により、お米 300 キロを、AMDA 子ども食堂支援プラットフォームを通じて、希望する子ども食堂 5 団体に寄付しました。小分けにしたお米は各世帯が持ち帰り、成長期のお子さんがいるご家庭からは、「主食のお米は大変ありがたい」との声が聞かれました。今回の活動を通じて、これまで繋がり薄かったお子さんやご家族ともご縁ができ、物資を介することで、「実はこういう状況で・・・」などと、次の支援を具体的に検討できる機会となりました。

このほか、ガンゼラブアース倶楽部様のご寄付により、支援する子ども食堂 8 団体を対象に肌着の配布を行いました。サイズの合う肌着を選び、子どもと保護者の分を一緒に配布した今回の寄付。受け取った方々からは、「信頼できる製品でありたい」と喜ばれました。



（AMDA 理事 財務会計 難波 比加理）

### 【仙台夜まわりグループを通じた肌着とリュックサックの寄付】



東日本復興事業の支援先である『仙台夜まわりグループ』を通じ、AMDA は東日本大震災やコロナ禍の影響を受けた路上生活者や生活困窮者の方々を対象に、肌着とリュックサックを寄付しました。肌着はガンゼラブアース倶楽部様が、リュックサックはAMDA が提供したものです。物資を受け取った方々からは、「いずれも生活に欠かすことのできないもの」として喜ばれました。

（AMDA 理事 財務会計 難波 比加理）

### 【東日本復興支援～宮城県気仙沼市南町紫神社前商店街からの報告】

AMDA は、東日本大震災以来、宮城県気仙沼市にある南町紫神社前商店街を継続して支援してきました。近年の長引くコロナ禍と物価高騰のため、食料品をはじめとする物資支援を行ってきた同商店街。この度、高校生までのお子さんがあるご家庭 100 世帯を対象に、食料品はもとより、J.S.Foundation 様よりご寄贈いただいた T シャツやタオルなどの物資を改めて配布しました。早くから列に並ばれた方々は、お礼の言葉とともに物資を受け取っていました。

またゴールデンウィークのイベントとして、商店街では、子どもビンゴ大会や歌のステージ、子ども縁日を開催。商店街中央広場で気仙沼中学校と城南中学校の有志が作成した 2 種類のこいのぼりを展示しました。1 つは、気仙沼を応援する『メッセージこいのぼり』、もう 1 つは、各方面より支援を受けた気仙沼からの感謝を伝える『ありがとうこいのぼり』です。これらのこいのぼりが風になびく中、会場は笑顔と音楽で溢れ、たくさんの親子連れで賑わいました。とりわけ、2011 年から続けてきた『ありがとうこいのぼり』は、気仙沼市での掲揚は今回が最後となりました。



このほか、去る 3 月には近畿大学寺川ゼミの学生さん 30 名とゼミを指導する寺川先生が、また 5 月には筑波大学附属駒場中学校 3 年生の皆さんが同商店街を訪問。商店街復興に関するこれまでの経緯について学びました。

（AMDA 理事 財務会計 難波 比加理）



## フィリピン・カビテ市火災被災者支援活動



現地時間 4月26日、フィリピンの首都マニラの南西に位置するカビテ市にて大規模な火災が発生。AMDA フィリピン支部は地元の医師と連携して情報収集を開始。約1,000世帯が被災し、多くの避難者が同市内の小学校に避難している状況を受け、5月7日、同支部はAMDA本部ならびに現地の団体と合同で、「カビテ市で助け合おう("Bayanihan sa Cavite")」と題し、支援活動を実施しました。

同日、合計24人(フィリピン支部長および副支部長含む医師14人、看護師3人、薬剤師1人、学生などのボランティア6人)が活動に参加し、合計1,089人を無料で診察しました。高血圧、糖尿病などの持病を持つ方々から診察を希望されることが多く、必要に

応じて薬やビタミン剤を提供しました。また、今後の生活の再建に関しての不安や、長い避難生活による感染症蔓延への懸念などを訴えられる方もおられました。加えて、今回の診察中に結核の疑いのある方々を見つけ、地域の保健所につなぐことができました。

この日は、医療支援のほか、避難所の子どもたちへのメンタルケアとして、塗り絵やお菓子を渡し、一緒にゲームも行いました。

AMDA フィリピン支部のエルレイ・ナバロ支部長は活動後、「ご協力者とのパートナーシップを通じて、災害時であっても『誰一人取り残さない』という、フィリピン人の『助け合いの精神』は、心の中で息づいていることが再び証明されました。今回の活動に対しご支援いただいた皆様にご心よりお礼申し上げます」と話しました。



(フィリピン担当 ブルックス 雅美)

## リプロダクティブヘルス / ライツと子宮頸がんに関するワークショップ (AMDA カンボジア支部)



AMDA カンボジア支部は、2022年12月5日と10日の2回に渡り、チェンラ大学と共同で、ボランティアの学生を対象とした「性と生殖の健康および権利」(リプロダクティブヘルス/ライツ)に関するワークショップを開催しました。

コロナ禍以前より若年層の性感染症予防に関する啓蒙活動を行ってきた同支部。今回はリプロダクティブヘルス/ライツに加えて、有識者を招いて子宮頸がんの特化した講義を行いました。

12月5日に行われた最初のワークショップでは、参加した60名の学生に対し、大学や病院から招かれた専門家が、子宮頸がんがもたらす社会的影響について知見を述べました。

その後、12月10日に行われた2回目のワークショップでは、『生殖に関する健康と権利、そして未来』と題した講義が行われました。とりわけ、「子どもを産むか、産まないか、いつ、何人子どもを持つのかを女性が自分で決められる権利」について、地方における現状が取り上げられました。この日の参加者は75名でした。

同支部では、学生ボランティアを通じてHIV/AIDSや性感染症予防に関する冊子を地方の学校に配布しています。今回、新たに1万部のパンフレットと500冊の冊子を増刷しました。

これらの活動には、カンボジア事業を継続的に応援してくださっている(株)山一観光様のご支援を活用させていただいています。(AMDA本部 近持 雄一郎)